



 Data	2022-93
監督・脚本: バンジョン・ピサンタ	
ナクーン	
原案・製作: ナ・ホンジン	
出演: ナリルヤ・グルモンコルベチ	
/ サワニー・ウトーンマ/シ	
ラニ・ヤンキッティカン	

## みどころ

祈禱師イルグァンを主人公にした韓国映画『哭声/コクソン』（16年）には日本人祈禱師もいたが、本作でタイのバンジョン・ピサンタナクーン監督とタッグを組んだ韓国のナ・ホンジン監督は、タイ東北部イサーン地方の女祈禱師ニム（巫女、シャーマン）に注目！仏教が広まる13世紀以前の“ピー信仰”とは？

“女神バヤン”は人々にどんな効用を？それについての取材陣に対するニムの答えは明確だったが、ある葬儀の後、姪のミンに悪霊が憑りついたから、大変！その原因は？解決策は？

『犬神家の一族』（76年）はストーリーにピッタリのタイトルだったが、“女神の継承”と題する本作もそれは同じ。『カメラを止めるな！』（17年）で見た、さまざまなゾンビ以上の怖さを見せるミンの変貌ぶりは如何に？そして、“女神の継承”をめぐる大規模な儀式の成否は？ニムの生死は？

本作後半からクライマックスにかけての恐ろしさと迫力はピカイチ。それはあなた自身の目でしっかりと！こりゃ怖い！こりゃすごい！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ナ・ホンジン監督が、『哭声』に続いて祈禱師に着目！■□■

韓国ではキム・ギドク亡き後も、ホン・サンス監督が「うまい、安い、早い」の路線を引き継いでいるし、ポン・ジュノやパク・チャヌクは今や世界の巨匠に成長した。若手女性監督の活躍もすごい。そんな中、長編デビュー作たる『チェイサー』（08年）（『シネマ22』242頁）も、続く『哀しき獣』（10年）も大ヒットさせたのが、ナ・ホンジン監督。この2作は、“韓国ノワール”と呼ばれる「スリラーもの」だったが、続く第3作『哭声/コクソン』（16年）（『シネマ39』195頁）でナ・ホンジン監督は祈禱師に注目し、

横溝正史の『八つ墓村』（77年）ばりの（？）おどろおどろしい傑作を完成させた。当時の日本では「あたりじゃ！」が流行語になったが、祈祷師の社会的身分は低かった。しかし、『哭声／コクソン』を見ると、韓国では悪霊の退治を職業とする祈祷師の地位が高いことを知ってビックリ！同作には國村隼も日本人の祈祷師役として登場していたが、あっと驚く世界観を構築した同作は“韓国版エクソシスト？セブン？ゾンビ？”として大ヒット！

本作は、そんなナ・ホンジン監督が原案を作り、プロデューサーとなったうえで、タイのバンジョン・ピサントナクーン監督とタッグを組んだものだが、そのきっかけは、彼が『哭声／コクソン』でファン・ジョンミンが怪演したイルグアンという祈祷師の「生い立ちを伝えたいと思った」ことだ。韓国はキリスト教徒が多いが、「微笑みの国」と呼ばれるタイは圧倒的に仏教徒が多い。私も一度タイ旅行に行ったことがあるが、そこでは両手を合わす挨拶が常で、タイ人の人懐っこさを実感したものだ。しかし、しかし、本作冒頭、タイ東北部イサーン地方にある小さな村では？

## ■□■タイトルの意味は？原題は「巫女」！ピー信仰とは？■□■

本作の原題は『**รำวง** (RangSong)』。これは、タイ語で「祈祷師」「巫女」「シャーマン」の意味だ。しかし、韓国のナ・ホンジン監督が原案を手がけ、プロデューサーとして、タッグを組む本作の監督に指名したのは、タイのバンジョン・ピサントナクーン監督。彼は『心霊写真』（04年）がハリウッドでリメイクされ、『愛しのゴースト』（13年）でタイ歴代興行成績1位を記録した監督らしい。私は『愛しのゴースト』だけは鑑賞していた（『シネマ35』未掲載）が、『哭声／コクソン』に続いて、その主人公、祈祷師イルグアンの生い立ちを描きたいと願うナ・ホンジン監督にとっては、そんな両作品をヒットさせたタイのバンジョン・ピサントナクーン監督は最適のパートナーだったらしい。

巫女やシャーマンと聞けば、日本でもおなじみ。さしずめ、邪馬台国の女王、卑弥呼は巫女やシャーマンの代表・・・？また、山や川、森などの森羅万象に宿ると言われている精霊も、日本ではおなじみだ。前述したように、タイは仏教国だが、仏教が伝来した13世紀以前のタイには、パンフレットにある高田胤臣氏（タイ在住ライター）のコラム「細部が原寸大イサーンだからこそ怖さが増す」によれば、「ピー信仰」、すなわち森羅万象に神や精霊が宿ると考える信仰があったらしい。そして、現在のタイではタイ仏教の様式が取り入れられているものの、村社会の東北部イサーン地方では、「ピー信仰」が強いらしい。なるほど、なるほど・・・。

本作のパンフには、前述の高田胤臣氏のコラムの他、相田冬二氏（映画評論家）のコラム「わたしたちは供物。」もある。両者ともに超難解だが、こりゃ必読！

## ■□■女神バヤンの祈祷師ニムを実況中継！そこに異変が！■□■

本作は、タイ東北部イサーン地方の村で暮らす祈祷師ニム（サワニー・ウトーンマ）の独白からストーリーが始まる。ニムは先祖代々、女神バヤンに選ばれた祈祷師として務めを果たしてきた一族の次女。本来、祈祷師を継ぐべき長女のノイ（シラニ・ヤンキッティ

カン)が、それを拒絶してキリスト教徒になったため、やむを得ずニムが代わったらしい。そんなニムにインタビューしているのは、ドキュメンタリーの撮影をしているクルーたちだ。縫製業で生計を立てるかたわら、村人たちの悩み相談を聞いているニムは、「がんを治すのは医者だが、もしも悪霊に苦しむ者がいれば、それを助けるのが私の仕事だ」と明るく語っていたから、今では祈祷師の仕事に誇りを持っているようだ。

そんなある日、ヤサンティア家に嫁いだニムの姉ノイの夫が他界し、その葬儀が行われるところから、本作の本格的ストーリーが始まっていく。これは『犬神家の一族』(76年)と同じような設定だが、その葬儀の席で、がんで死亡したノイの夫の父親は、工場が傾き保険金目的の放火後、逮捕されて服毒自殺したこと、祖父は労働者に石を投げられて死亡したこと、等が語られていく。そして、葬儀の夜から突如としてノイの娘のミン(ナリルヤ・グルモンコルペチ)が不可解な言動を見せ始めることに。これは一体ナニ?『犬神家の一族』では、金田一耕助探偵は問題の発端は“犬神家のたたり”だと判断したが、こりゃひょっとして、ヤサンティア家も犬神家と同じような“たたり”に見舞われているの?そしてまた、本作に見るミンの異変はどこまでエスカレートしていくの?

### ■□■異変は拡大!ミンに憑りついた悪霊とは?■□■

『犬神家の一族』では、冒頭に読み上げられる遺言書が大きな問題提起をすることになったが、ハローワークで働きながら友人たちとクラブに通ったり、おしゃれをしたりするのが大好きな、今どきの女性であるミンを突如襲った異変は一体ナニ?男友達に罵声を浴びせたり、見知らぬ子供を突き飛ばすなど、人格が変わったような奇行を連発するようになった彼女は、その後、極度の体調不良に見舞われ、不気味な悪夢にうなされるミンの異常行動は次々とエスカレートしていくことに。その結果、勤務先のハローワークもクビになってしまったが、解雇の理由とされた防犯カメラの映像にはあまりにもショッキングなミンの行動がはっきりと!この異変の原因は?ミンに憑りついた悪霊とは?

自宅の浴室で手首を切った血まみれのミンを発見し、病院に運び込んだノイは、ミンの異変は、祈祷師一族の血を引くミンをニムの後継者に選んだ女神バヤンが憑依しているのではないかと考えたが、それはそれで筋が通っている。そこで、最愛の娘を救いたいノイは、ニムにバヤンを受け入れる“代替わりの儀式”をしてほしいと懇願したが、私にはここらあたりの展開が十分理解できない。さらに、それに対するニムの答えは、意外にも「儀式はできない。ミンに憑いているのはバヤンではない」というものだったから、アレ。この中盤の展開は難解だから、しっかり鑑賞を!

### ■□■ミンは失踪!ニムの祈祷の効用は?ミンの変貌に注目!■□■

そんな状況下、ミンが謎の失踪を遂げてしまったから状況はさらに深刻だ。そこで、地元の人々や警察が大規模な搜索を繰り広げる中、ニムは姪のミンの悪霊を取り払うため祈祷の儀式を行うことになったが、そのことの意義は?狙いは?

本作導入部では、取材陣のインタビューに応える形で、ニムから祈祷師一族が帰依して

いる女神バヤンの石像について解説され、現地も見せてもらうことができる。この石像は険しい山の中に建てられており、その中にタイ東北部イサーン地方におけるピー信仰のすべてが宿っているはずだから、その姿カタチに注目！そして、ミンが失踪してしまうという大変な事態を迎えた後半からは、ミンに悪霊が憑りついた原因は、祈禱師の座をめぐるノイとニムの姉妹間の確執にあることが見えてくるうえ、ニムからミンへの“女神の継承”（代わりの儀式）を行うことの意義が浮かび上がってくるので、それに注目！

タイのバンジョン・ピサントナクーン監督は、『女神の継承』の“世界観”を表現するため、1年間をかけ、30人以上の祈禱師と出会い、話を聞き、リサーチを重ねてきたそうだ。スクリーン上で観るニムによるさまざまな儀式は、それらを踏まえた、本作でしか見ることのできない完全オリジナルバージョンだから、それにも注目！

大規模な祈禱の日を設定されたが、なおミンは発見されないまま。ミンに憑りついた邪悪な悪霊はあの若くてピチピチしたミンをどこまで変貌させていくの？『カメラを止めるな！』（17年）（『シネマ42』17頁）では、次々と登場してくる“ゾンビ”によって、あつと驚く世界観が表現され、爆発的大ヒットになったが、本作後半に見るミンの変貌ぶりは如何に？いきなり、隠しカメラの前に飛び出してくる怪物のようなミンの姿にビックリなら、ラストに向けて、光るような目になっている不気味なミンの姿にもビックリ！ああ、怖い！こりゃまさに、現代のエクソシスト！

## ■原因はヤサンティア家の歴史に？たたりじゃ！■

親の因果が子に報い……。昭和24年生まれの子が小学生の頃は、何らかの“死”に直面した時、そんなフレーズをよく耳にしていた。そんな視点で本作を観ると、まさに「親の因果が子に報いた」のは、ヤサンティア家らしい。もちろん、それ以上の問題は、祈禱師一族の長女、次女として生まれたノイとニムとの間の祈禱師の継承をめぐる確執だが、「女神の継承」はいずれ必要なこと。その場合、ニムの後継者にミンがもっともふさわしいことは当然だが、なぜそれがスムーズに行われないの？ちなみに、『柳生一族の陰謀』（78年）は、大御所・徳川家康の跡を継ぐべき者の確執・対立を描くものだが、それはどこにでもある「正当な継承者は俺だ！」という権力争いだった。しかし、本作では祈禱師の継承をめぐる権力争いが生じているわけではない。そのため、なぜミンに憑りついた悪霊がミンをあそこまで凶暴にしていくのかが私にはわかりにくい。もっとも、それは、『犬神家の一族』でも同じで、すべては、“たたりじゃ！”で説明されるのだろう。

大混戦がエスカレートしていく中、ミンの悪霊を取り除くことができるのだろうか？ニムの祈禱師としての力はそこまで及ぶのだろうか？ミンの異常性、凶暴性がエスカレートしていく中、隠しカメラまでセットして決死の取材を行っているドキュメンタリーのクルーたちの安否も心配だが？さらに、ニム自身の生死は？本作後半からクライマックスにかけての怒涛の展開はあなた自身の目でしっかりと！こりゃ怖かった！これはすごかった！

2022（令和4）年8月5日記